

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷一十二第

行發日一月九年四十四正大

論叢

資本論第一版と第二版との相違法學博士 河上肇

南京條約前の治外法權問題に就いて 文學博士 矢野仁一

無收益財産の課税 法學博士 神戸正雄

江戸時代に於ける田島永代賣買の禁止 文學博士 三浦周行

時論

支那の排外運動に對する根本方策 法學士 作田莊一

說苑

農政上より見たる家産制度 經濟學士 八木芳之助

リカアドに於ける労働價值法則の妥當性に就いて 經濟學士 森耕二郎

雜錄

近世農村問題の性質 經濟學博士 本庄榮治郎

我國最近の死産に就て 經濟學士 岡崎文規

間接稅負擔の地方別研究 法學士 沙見三郎

法令

五分利國庫債券（第二十五回）發行規程・朝鮮簡易國勢調査ニ關スル件・樺太簡易國勢調査施行規則

（禁轉載）

經濟論叢

第二十一卷 第三號 (通卷第百貳拾三號) 大正十四年九月發行

論叢

資本論第一版と第二版との相違

河 上 肇

マルクスの主要著作たる資本論の第一巻第一版は、今日容易に手にすることが出来ない。私の知るかぎりにおいて、日本では、大原社會問題研究所がこれを備へてゐるだけである。私が近頃これを通覽するの機會を得たのも、一に同研究所の厚意による。今この短文を起草せんとするに當り、私は先づこのことを明記して、同研究所に對し厚く感謝の意を表する。

資本論の第一版に附せられたマルクスの序文は、依然その後の版本にも載せられてゐるけれども、それには數行の文字が削除せられてゐる。

吾々は今日の流布本に載せられてゐる第一版の序文において、次の如き文句を見出す。

論叢 資本論第一版と第二版との相違

第二十一卷 (第三號) 二九九

* 資本論の最後の篇たる『資本の蓄積過程』に著しき補訂が加へられたのは、第三版においてである。私はこの短文において、問題を第一版と第二版との相違に限るが故に、それら第三版以下の訂正には言及しない。

『總て始めが困難である。これは有らゆる科學にあてはまる。だから、第一章、殊に商品の分析を含める節の理解は、最大の困難を呈するであらう。それゆへ私は、價値の實體の、および價値の大きさの、分析に特に關係してゐる部分については、出來得るかぎり之を通俗化した。』

さうして此の文句に續いては、『價値形態——その完成された姿は貨幣形態である——は、甚だ無内容であり簡單である』云々以下の文章が置かれてある。ところが第一版の折の序文を見ると、前に引用した文句に續いて、更に次の如く述べられてゐる。

『（……出來得るかぎり之を通俗化した）。價値形態の分析については之と趣を異にする。

前者の叙述におけるよりも辨證法がより鋭くなつてゐるから、それは理解し難い。だから私は、十分に辨證法的思惟に慣らされてゐない讀者に對しては、同節の第十五頁（上から十九行目）以下第三十四頁の終りまでを全く飛ばして仕まつて、その代りに本書に添付した附録「價値形態」を讀むことを勧める。そこでは、その科學的表現が許すかぎり、なるべく簡單に、しかも學校教師流に叙述することを試みた。附録を終へたならば、讀者はそれから再び本文の第三十五頁以下を讀み續けたら可い。』

今日の流布本における第一版の序文には、これだけの文句が削除されてゐるから、第一版には

嘗て「價值形態」と題する特別の附録が載つてゐたことさへ、今日では分らないことになつてゐる。

次に第二版を見ると、(それには第一版の序文が依然卷頭に載せられてゐるが、前記の文句は既に削除されてゐる) Vorwort zur ersten Auflage (第一版に對する序文)に附註して、Ein Nachwort zur zweiten Auflage folgt später (第二版に對する跋文は之を後に收む)としてある。この第二版の跋文は、今日の流布本では Zur zweiten Auflage として卷頭に載せてあり、(尤もカウツキの版本には、明かに Nachwort zur zweiten Auflage としてあるが)、高島氏の譯本にも『第二版序』としてあるが、實は元と序文ではなく跋文であつたのである。ところで、この跋文の最初の一頁餘に亘る部分は、從來の流布本に削除されてゐた。従つて高島氏の譯本を見ても、それは『經濟學は獨逸に於ては、今日に至るまで尙は一箇の外來科學である』といふ文句で始められてゐる。けれども、最初は、この文句の前に、次の如き文章が横はつてゐたのである。(カウツキ版には、從來削除されてゐた此の部分を、全部復活させてゐる)。

『第一版の讀者に對し、私は先づ、この第二版に行はれた變化について注意を與へる。本書のより細かな編別は、すぐ眼につく。増補した註は總て第二版の註と記しておいた。本文そのものについての最も重要な變化は次の如くである。

『第一章の第一においては、あらゆる交換價值がその上に表現されてゐるところの、方程式の分析により價值を引き出すことが、科學的により嚴密に成就され、また第一版においては暗示に止まつてゐたところの、社會的に必要な勞働時間による價值の大きさの規定と價值の實體との間における聯絡が、明かに舉示されてある。第一章の第三(價值形態)は全然書き改めた、それは第一版における二重の叙述だけで既に必要とされたことである。——序に述べておくが、かの二重の叙述(本文と附録とにおける二重の叙述を指す)は、在ハノーブの友人エル・クルゲルマン博士^{*}の勧めによつたものである。一八六七年の春、私は氏を訪問してゐたが、その際最初の校正刷(資本論第一版の)がハムブルグから到着した、そうして氏は私を説得するに、多數の讀者にとつては、價值形態について或る補充的な、もつと教科書的な解説が必要だといふことを以てした。——第一章の最後の節「商品の拜物教的性質云々」は大部分變つてゐる。第三章の第一(價值の尺度)は注意深く訂正した。第一版における同節は「經濟學批判、ベルリン、一八五九年」において既に施しておいた説明があるので、これをば疎略に扱つたからである。第七章、特に第二の部分は、著しく書き改めた。

『所々の訂正——それは屢々單なる文字の訂正に止まる——に一々立ち入ることは無用であらう。それは全卷に及んでゐる。……(下略)』

* 大原社會問題研究所の所蔵に屬する資本論の第一版は、マルクスがこのクルゲルマンに宛て贈つたもので、そのことはマルクスの自筆を以て卷頭の扉に記入されてある。——これは驚くべき稀有の珍本である。

この第二版の跋文を見れば、第一版と第二版との間には、可なり著しい差異あることが、想像され得る。しかるに、前に一言したやうに、カウツキーの版本が出るまでは、普通の流布本には——英譯本にも——茲に引用した文句が削除されてゐたので、吾々は、吾々の今日手にし得る資本論が、その第一版と、さまで著しく相違してゐやうとは思はなかつたのである。なほ、恐らく此の考を強めたものは、第三版に加へられたエンゲルスの序文である。それには、『マルクスは最初、第一卷の本文を大部分書き換へ、多くの理論的論點をより鋭く言ひ現はし、新たな論點を附け加へ、歴史のおよび統計的材料を最近時に至るまで補足しやうと目論んでゐた。しかし彼の病勢と、第二卷の仕上げに對する熱望とは、彼をして之を斷念せしめた』云々である。なるほど、マルクスが『第一卷の本文を、大部分書き換へ』やうと思つてゐて、遂にそれを果し得なかつたといふことは、エンゲルスの言ふ通りであらう。けれども、この記事を読む吾々は、マルクスが第一版に對し殆んど何等重要な變更を加へなかつたかの如く、思ひ過まるのである。今この草稿の目的とするところは、上述の如き事情より從來あまり注意されざりし第一版と第二版との間における差異の概略を述べんとするに在る。このことは、前に引用した第二版における跋文の一節を註釋することにより、おのづから成し遂げられる。

* エンゲルスはそれに引續く文章において、資本論最後の部分たる『資本の蓄積過程』以前の諸篇は『既に根本的に訂正されてゐた』と、言つてゐるに拘らず。

** 前に注意した如く、第三版以下の増訂には觸れない。

第一に、『本書(第二版を指す)のより細かな編別は、すぐ眼につく』とマルクスの言つてゐるやうに、第一版の目次と第二版の目次とを比較して見ると、章節の分け方が全く違つてゐる。

第一版では、第一卷『資本の生産過程』が、篇に分たれずに、直ちに章に分たれてゐる。さうして其等の章は、

第一章 商品および貨幣

第二章 貨幣の資本への轉化

第三章 絶對的剩餘價值の生産

第四章 相對的剩餘價值の生産

第五章 絶對的および相對的剩餘價值の生産に關するより進んだ研究

第六章 資本の蓄積過程

の六つに止まつてゐる。ところが第二版では、第一卷『資本の生産過程』が六篇に分れ、各篇はまた章に分れ、かくて全體が二十五章から成り立つことになつてゐる。それは今日の流布本におけると同じだが、前者との對照の便宜のため、茲にその篇名だけを列擧しておく。

第一篇 商品および貨幣

第二篇 貨幣の資本への轉化 (篇名と同じ題名の第四章を含む)

第三篇 絶對的剩餘價値の生産 (第五章より第九章に至る、各章の題名は之を略す、以下また然り)

第四篇 相對的剩餘價値の生産 (第十章より第十三章に至る)

第五篇 絶對的および相對的剩餘價値の生産 (第十四章より第十六章に至る)

第六篇 勞 賃 (第十七章より第二十章に至る)

第七篇 資本の蓄積過程 (第二十一章より第二十五章に至る)

是等の各篇は、大體において第一版の章に相應するのであるが、しかし第六篇「勞賃」は、第一版では第五章の第四となつてゐたものが、新たに獨立して篇となつたのである。従つて第一版は全部六章から成つてゐるが、第二版は全部七篇から成つてゐる。

第二、「増補した註は總て第二版の註と記しておいた」とマルクスが言つてゐるのは、今日の版本でもそのまゝになつてゐるから、詳しく述べる必要はない。

第三に、マルクスが「第一章の第一においては、あらゆる交換價値がその上に表現されてゐるところの、方程式の分析により價値を引き出すことが、科學的に、より嚴密に成就され云々」と言つてゐる點は、價値論の研究に對し頗る重要な意義を有つと思はれる。今この範圍について、吾々が第一版と第二版(今日の流布版も略ぼ第二版に同じ)とを比較するならば、或は大なる或は小

なる幾多の訂正が、到るところに行はれてゐることを發見するのであるが、そのうち最も主なるものは、かの有名なる商品交換の方程式に關する分析的説明の變化であらう。

既に廣く知られてゐるやうに、資本論の卷頭には、先づ使用價值に關する簡單な説明があり、次いで交換價值の考察に入り、それは『先づ一つの種類の使用價值が他の種類の使用價值と交換せらるゝ比例として現はれ』、従つてそれは『何んだか偶然的なものであり純粹に比較的なものであるかの如く見ゆる』が、しかし『吾々は問題をより精しく觀察しやう』といふことから、それに引續き、謂ゆる交換方程式の分析が行はれてゐるのである。

ところで此の分析的説明の最初の場所におかれた文句については、私は嘗て本誌において各種版本の異同を列擧したから、茲には之を略する。しからは其の續きは何うなつてゐるかと言ふに、そこには次の如く述べられてゐる。『更に二つの商品、例へば小麥と鐵とを取つて見やう。此等のものゝ交換比率はたとひ如何やうであらうとも、それはいつでも、一定分量の小麥が或る分量の鐵と等位に置かれるところの、一の方程式で現はされる……この方程式は何を意味するか？』これが其處に提出された有名な問題である。さうして第二版では、——今日の版本におけると同じやうに、——すぐに之をば、『それは同じ大きさの或る共通物が二つの異つた物のうちに……存在することを意味する』といふ句で承け、次いで、然らばその共通物は何であるかとの

* 本誌第一六卷の一、『資本論中或る一句の各種版本に於ける異同について』

探求に入り、先づ使用價值を抽象し、それと同時に、商品の生産のために費された勞働の具體的有用性を抽象し、かくて「無差別なる人間勞働の單なるギャレルテ」を見出し、最後に「是等の物はそれに共通な斯かる社會的實體の結晶として價值である」と結んである。この一帯の個所は、我國においても、今日まで屢々問題とされたところであるから、これについて委しく説明することは、恐らく無益であらう。ただ私が茲に主として明かにしやうと思ふことは、この一帯の議論が、第一版においては、甚だ違つた形を以て展開されてゐるといふことである。

「この方程式は何を意味するか？」今日の版本においては、この疑問にすぐ引き續く言葉は、「それは同じ大きさの或る共通物が二つの異つた物のうちに存在するといふことを意味する」となつてゐるが、第一版では、「それは二つの異つた物のうちに、即ち一クォーターの小麥におけると同じくアツェントネルの鐵のうちに、同一の價值が存在するといふことを意味する」となつてゐる。即ち今日の版本では、分析の最後の結果として引き出されてゐる價值が、第一版では、分析の第一歩に現はれ、その最後に現はれてゐるものは、價值でなくて勞働である。試に第一版における問題の場所を譯出すれば、次の如くである。

「この方程式は何を意味するか？ それは二つの異つた物のうちに、即ち一クォーターの小麥におけると同じくアツェントネルの鐵のうちに、同一の價值（既に述べたやうに、今日の版本では、

* 今日の版本では『價值』の代りに、『價值——商品價值』としてあるが、第二版では、まだ茲に掲げた通りになつてゐる。

この『同一の價值』が『同じ大きさの或る共通物』となつてゐる) が存在するといふことを意味する。だから兩者は、それ自身において一方のものでもなく又他方のものでもない或る第三者に等しいのである。従つて此の兩者の各々は、それが交換價值であるかぎり、他のものからは獨立に、

この第三者に還元し得られねばならぬ』。

これだけの範圍では、既に指摘したやうに、今日の版本で『同じ大きさの或る共通物』とあるところが『同一の價值』となつてゐる位のことだが、主な相違たるに止まる。吾々が甚しき相違を見出すのは、それに引續く文章においてである。第二版においては、(讀者の知らるゝ如く今日の版本においても亦た)、前記の文章の次ぎに、『簡單な幾何學上の一例がこのことを明かにする』といふ文句を以て始まる一節が置かれてゐるが、それは第一版においても同じことである。甚しく相違するのは、この幾何學上の事例以下に横はる一帯の分析である。第二版においては(今日の版本においても亦た)、『この共通物は、諸商品の幾何學的、物理學的、化學的、もしくはその他の自然的性質ではあり得ぬ』から始まつて、『是等の物(生産物)はそれに共通な斯かる社會的實體(無差別なる人間労働のギャレルテ)の結晶として價值である』といふ結語に終つてゐるが、それが第一版では次の如くなつてゐるのである。

『交換價值の實體が、商品の物理的な手に觸れ得る存在または其の物の使用價值としての存

在り、全然違つた獨立なものだといふことは、その交換關係から一目で分かる。それ（商品の交換關係）は正に使用價値の抽象によつて特徴づけられる。即ち交換價値の側から觀察すれば、ただ其等の物が適當な比率においてさへ存在するならば、一の商品は有らゆる他の商品と全く同じである。

『だから諸商品は、其等の物の交換關係から、即ち其等の物が交換價値として現はれる形態から離れて、先づこれをただ價値としてのみ觀察すべきである。』

『使用對象または財として、諸商品は、形體的に相違せる物である。これに反し、諸商品の價値性は、其等のもの、一様性(Equality)を形成する。この一様性は、自然からでなく、社會から起る。様々なる使用價値において全く様々に現はれてゐるところの、この共通な社會的實體は、——勞働である。』

なほマルクスは、勞働の分量はその時間によつて測られると説明した後、もしさうだとすれば、『人が怠惰であればあるほど、或は不熟練であればあるほど、商品の生産のために、多くの時間を要するから、彼れの作る商品は、それだけ價値多いもの、やうに見えるかも知れない』といふ疑問を起し、これに對して、第二版においては——今日の版本におけるも略ぼ同じ——次の如く述べてゐる。

『しかし、價値の實體を形成する労働は、等一なる人間的労働であり、同一なる人間的労働力の支出である。商品世界の價値に現はれるところの、社會の全労働力は、たとひ無數の個人的労働力から成り立つてゐるにしても、この場合、一個の且つ同一の人間の労働力として通用する。是等個人的労働力の各々は、それが一の社會的平均労働力たる性質を有ち、かゝる社會的平均労働力として働くかぎり、かくて一商品の生産に對しただ平均的に必要な又は社會的に必要な労働時間を費すに止まるかぎり、いづれも皆な同一なる人間の労働である』。

ところが第一版では、これに相當する部分が、『しかし社會的に必要な労働時間のみが價値を形成するものとして算へらる』といふだけの一句に止まつてゐる。マルクスが第二版の跋文において、『第一版においては暗示するに止まつてゐたところの、社會的に必要な労働時間による價値の大きさの規定と價値の實體との間における聯絡が、明かに擧示されてある』と言つてゐるのは、恐らく是等の點を指すのであらう。

第四、マルクスは『第一章の第三(價値形態)は全然書き改めた』と言つてゐるが、それは文字通りに全然書き改められてゐる。前に掲げた第二版の跋文によつて想像される如く、第一版には『價値形態』と題する附録(七六四頁より七八四頁に至る)があるが、第二版以後では、この附録が本文に取り入れられた。だから本文は全然書き改められたことになつてゐる。尤も第一版の附録に

* その後『價値の總量』と訂正

あつた若干の章句は、本文のうちに今日もなほ殘存する。但しその異同は廣汎に亘るがゆへに、茲には略する。

第五、「第一章の最後の節」商品の拜物教的性質云々」は大部分變つてゐる。この「商品の拜物教的性質およびその秘密」と題する節は、カウツキーの解釋によると、資本論の「全篇を通じて最も重要な一部と見られる、故に資本論の研究者は先づ此の一章に向つて、特別の注意を拂はねばならぬ」ものであるが、(私はそれを商品生産の社會が生産し得た科學的産物の同時に最上の詩篇を兼ねたものと看做すことも出来やうと思ふ)、これが獨立の一節を成すに至つたのは、第二版からである。第一版では、それに相當するものが、附録「價值形態」のうちに見出される。詳しく言へば、第一版の附録「價值形態」のうち、第一の「單一なる價值形態」を論ずる條下において、等價形態の特徴を述ぶるに際し、マルクスは、その第一特徴として「使用價值がその反對物の、即ち價值の現象形態となる」ことを挙げ、その第二特徴としては「具體的勞働がその反對物の、即ち抽象的な人間の勞働の現象形態となる」ことを、その第三特徴としては「私的勞働がその反對物の形態、即ち直接的社會的形態となる」ことを挙げ、最後に第四特徴として「商品形態の拜物性は、相對的價值形態におけるよりも、等價形態においてより著しい」ことを擧げてゐるのであり、さうして此の最後の特徴を説明するために費してゐるところは、僅に一頁半に過ぎぬのである。

ところが第二版に至つては、——その後におけるも亦た同じ、——『價值形態または交換價值』と題する(第一章)第三節のうち、第一の『單一なる價值形態』を論ずる條下では、等價形態の特徴をば三つだけ述べてゐるに止まり、先きに第一版の附録において第四の特徴として掲げた『商品の拜物性』に關する問題については、これに一言も及んでゐない。さうして、第一の『單一なる價值形態』から順次に第四の『貨幣形態』までを説明して、それで此の第三節を終り、然る後、別に獨立の第四節を設け、それをば『商品の拜物教的性質およびその秘密』となしてゐるのである。だから第二版以後の版本にあつては、商品の拜物性なるものが、等價形態の他の特徴と並んで、その第四特徴を成してゐるといふことが、叙述の外形から消え去つてゐる。

第六、『第三章の第一(價值の尺度)』は注意深く訂正した。斯様にマルクス自身は言つてゐるが、試に第一版と第二版とを比較して見ると、一見したところでは、殆ど聯絡を附けかねる程度に、兩者の差異は甚しい。

第七、『第七章、特に第二の部分は、著しく書き改めた』。茲にマルクスが第七章の第二といふは、『剩餘價值率』と題する章の第二 Darstellung des Produktenwertes in proportionalen Teilen des Products を指す。この剩餘價值率の章を節に分つことは、第二版で始めて行はれたことだから、問題の部分も、第一版では獨立の節を成さず、ただ其の起點が『剩餘價值は剩餘生産物の上に現

はれる』といふ獨立の章句によつて、前と區割されてゐるだけである。この部分は成るほど著しく書き改められてゐるに相違ないが、しかし其の部分は、カウツキーの版本でいへば、一七二頁の全部および次の頁の終りから十二行目までの個所に止まる。

私は以上を以て、資本論の第一版と第二版との間に存する主なる相違を列擧した。もし之によつて、第一版の或る部分——後の版に訂正せられた部分——が今日の學界から見失はれてゐるといふこと、且つこのことは、最後の姿における資本論の直前に横はるところの、マルクスの重要な作物の一部が見失はれてゐるに等しいといふことを、明かにし得たならば、この拙稿の目的は既に達せられたのであるが、私はなほ最後に、マルクス自身が如何にその思想の表現に注意深く苦心したかの一つの事例を擧げて、文字の末に拘泥するかに見ゆる私の仕事、必ずしも無用でないことの證據としやうと思ふ。

資本論第二版の卷尾には八頁分の附録がついてゐるが、その一は『本文訂正』と題し、その二は『追加せる註』と題する。本文訂正は六箇所だけであるが、その第三には、次の如く誌してある。

ad Kapitel X, p. 334, Z. 12 von oben lies: „Der wirkliche Werth einer Waare ist aber nicht ihr individueller, sondern ihr gesellschaftlicher Werth, d. h. er wird nicht durch die Arbeitszeit gemessen, die sie im einzelnen Fall

* 第三版において更に最後の篇の増訂が行はれてゐるから、それは茲に指摘した部分よりも猶ほ廣汎に亘る。

der Producenten thatsächlich kostet, sondern durch die gesellschaftlich zu ihrer Produktion erheischte Arbeitszeit." それなら本文は元々何うであつたかと思ふに、それは次の如くである。

Der wirkliche Werth einer Waare ist aber nicht durch ihren individuellen, sondern durch ihren gesellschaftlichen Werth bestimmt, d. h. nicht die Arbeitszeit, die.....

即ちその相違は、ist bestimmt であつたのが、改めて ist となり wird gemessen 々に分けられたに過ぎない。

また訂正の第六には、次の如く誌してある。

ad Kapitel XI, p. 330, Z. 5-7 von oben, lies: „In Werth vergegenständlichte Arbeit ist Arbeit von gesellschaftlicher Durchschnittsqualität, also die Aeusserung einer durchschnittlichen Arbeitskraft.“

ところで本文は also 以下のところから und so ist auch der Werth der Arbeitskraft der Werth durchschnittlicher Arbeitskraft となつてゐたのである。なるほど其れは訂正された通りでなければならぬが、しかし恐らく大多数の讀者は、それが訂正されてゐても、ゐなくても、殆ど之に注意することなしに打ち過ぐるであらうと思はれる。しかるに著者が斯様な點まで、印刷後にわざわざ訂正してゐるところを見れば、資本論の全巻を通じて如何に彼が一字一句の末まで苟くもしなかつたかが分かると思ふ。